

# 第7回 日本栄養学教育学会 学術総会

テーマ

「管理栄養士・栄養士教育のあり方」

会期 平成30年9月2日（日）

会長 斎藤 トシ子 新潟医療福祉大学健康科学部教授

会場 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

一般社団法人日本栄養学教育学会  
Japanese Association of Nutritional Science Education



# 第7回日本栄養学教育学会学術総会

## ご挨拶

学術総会会長 斎藤 トシ子

(新潟医療福祉大学健康科学部 健康栄養学科)

第7回日本栄養学教育学会学術総会を2018年9月2日(日)、朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催させていただくこととなりました。

現代の栄養課題は、低出生体重、若い女性のやせ、中高年男性の肥満による生活習慣病の増加、高齢者の低栄養など多種多様ですが、現在の管理栄養士・栄養士教育で、これら課題解決を図る人材育成が十分になされていると言えるでしょうか？ 例えば、栄養課題を解決するためには、十分な科学的エビデンスを調べ、その方にあったテイラーメイドの栄養管理を行う必要がありますが、現在の養成教育でその力を養うことは可能か？ また、栄養指導をする際には、対象者の栄養状態を判断(栄養診断)し、カウンセリング、コーチング、動機づけ面接などを用いて対象者に寄り添う必要がありますが、現在の教育で、このような技法を身につけることは可能か？ さらに、管理栄養士・栄養士は、専門職としての使命と責務を自覚し活動することが重要ですが、現在の教育で、職業倫理に関する教育は十分になされているか？ など、議論しなければいけないことが沢山あるように思います。

そこで、今回の学術総会では、時代の変遷やグローバル化に対応でき、社会及び他職種から真に必要とされる管理栄養士・栄養士の養成教育をどうすべきか、関係者が一堂に会し、今まさに、真剣に議論する必要があると考え、「管理栄養士・栄養士教育のあり方」をメインテーマとし、企画いたしました。

今回の学術総会が、一般社団法人日本栄養学教育学会設立の目的(「管理栄養士・栄養士教育の理念、教育内容、教育技術等の研究、検討、情報交換を行う」)の達成につながるとともに、わが国の栄養学教育の充実と発展に向け、実りある大会となるよう、関係者一同、鋭意準備を進めております。徳島大会の実績を引き継ぎ、次の富山大会につなげることができるよう、総会会長としての役割を果たしたいと存じます。

ご講演をお引き受けくださいました皆様、一般演題にご登録いただきました皆様、会員の皆様、企画・運営にご協力いただきました皆様方に心より御礼申し上げます。

本学術総会は、2018年9月3日～5日開催の第65回日本栄養改善学会学術総会との連携開催となっておりますため、4日間を新潟市でお過ごしになり、日本海の幸と夕日をご堪能いただければ幸いです。

# 第7回日本栄養学教育学会学術総会

## 目次

ご挨拶	1
開催概要	3
全体プログラム・日程表	4
参加者へのご案内	5
講演者、発表者、座長へのご案内	6
会場へのアクセス	7
会場案内	8
<b>プログラム</b>	
一般演題（口頭発表）	10
一般演題（ラウンドテーブルディスカッション）	12
特別講演・招待講演	13
<b>抄録</b>	
一般演題（口頭発表）	16
一般演題（ラウンドテーブルディスカッション）	25
特別講演・招待講演	31

## 開 催 概 要

学会名 第7回日本栄養学教育学会学術総会

テーマ 『管理栄養士・栄養士教育のあり方』

会 長 斎藤 トシ子（新潟医療福祉大学健康科学部長 健康栄養学科教授）

日 程 平成30年9月2日（日）

会 場 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター 2階 中会議室（201）

〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号

学術総会実行委員 新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科

斎藤トシ子， 稲葉洋美， 渡辺優奈

運営事務局 一般社団法人日本栄養学教育学会事務局

〒112-0002 東京都文京区小石川5-24-3

株式会社 同文書院内

FAX：03-3812-8456 TEL：03-3812-5151

メール：Jane7@dobun.co.jp

## 全体プログラム・日程表

会場 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター 2階中会議室 (201)

9:00	[受付開始]
10:00	9:30~10:15 理事会
	10:20~10:45 社員総会
11:00	10:50~11:00 学術総会 学会長挨拶
	11:00~11:40 一般演題 (口頭発表) O-1~O-4
12:00	11:45~12:35 一般演題 (口頭発表) O-5~O-9
13:00	12:40~13:30 昼食休憩およびテーブル配置換え
14:00	13:30~14:20 一般演題 (ラウンドテーブルディスカッション) R-1~R-6
	14:30~14:40 日本栄養学教育学会 理事長挨拶
15:00	14:40~15:40 特別講演
16:00	15:50~16:30 招待講演 I
17:00	16:35~17:15 招待講演 II
	17:20~17:45 講師と参加者との討議
18:00	17:50~17:55 第8回日本栄養学教育学会開催案内 終了

## 参加者へのご案内

- 参加受付** ○ 受付開始は 9 時 00 分からとなっております。
- 受付場所は、朱鷺メッセコンベンションセンター2 階 201 会議室前です。
- クロークは用意しておりません。館内ロッカーまたは個人管理をお願いします。
- 【設置場所】 1 階 エントランスホール 2  
2 階 エスプラナード（展示ホール A エレベーターとなり）
- 【設置サイズ・個数・利用料】
- 1 階 エントランスホール
- 大サイズ（高さ 37cm×幅 35cm×奥行き 42cm）：8 個口  
標準サイズ（高さ 29cm×幅 35cm×奥行き 42cm）：20 個口  
利用料：無料（但しご利用時に 100 円を入れて頂き、ご利用後に返金されます）
- 2 階 エスプラナード
- 大サイズ（高さ 37cm×幅 35cm×奥行き 42cm）：48 個口  
標準サイズ（高さ 29cm×幅 35cm×奥行き 42cm）：120 個口  
利用料：無料（但しご利用時に 100 円を入れて頂き、ご利用後に返金されます）  
大型サイズ（高さ 84cm×幅 34cm×奥行き 57cm）：8 個口  
利用料：200 円/1 日（24 時を超え翌日以降延長時、1 日につき 200 円の追加）
- 【取扱時間】 5:00～22:00

### 1) 事前参加登録をされた方へ

事前参加登録をされた方は、「事前参加受付」へお越しください。  
参加証と領収書をお渡しいたします。

### 2) 当日参加申込をされる方へ

当日申込の方は、「当日参加受付」へお越しください。  
下記の参加費と引き換えに、参加証と領収書をお渡しいたします。

参加費（講演要旨集代含む）

〔会 員〕 事前申込 3,000 円

当日申込 4,000 円

〔非会員〕 事前・当日申込 5,000 円

## 講演者、発表者、座長へのご案内

### 1) 特別講演および招待講演講師の方へ

- ・事前打ち合わせをさせていただきたいと存じますので、13時30分に、朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター2階 中会議室（201）にお集まりください。
- ・ご講演データは USB メモリーに入れてお持ちください。
- ・発表形式は Windows の Power Point 2013 です。

### 2) 一般演題（口頭発表者）の方へ

- ・10時15分までに、新潟コンベンションセンター2階中会議室（201）前「演者・座長受付」にて受付を行ってください。
- ・受付時に発表データ（USB）をお預かりいたします。
- ・ご自身の講演の前の演題時に、「次演者席」に着席してください。
- ・演題の講演時間は、発表7分間、討論2分間、計9分間です。座長の指示に従ってください。
- ・発表時のスライド操作は発表者でお願いいたします。
- ・発表形式は Windows の Power Point 2013 です。

### 3) ラウンドテーブルディスカッション発表の方へ

- ・発表に使用する資料などは、各自でご準備いただきますようお願いいたします。
- ・12時45分までに、「演者・座長受付」にて受付を行ってください。
- ・ラウンドテーブルディスカッションの全体時間は、50分間です。  
発表30分、ディスカッション20分を予定していますが、発表およびディスカッションの進め方は、発表者が座長兼コーディネーターを行う形でお願いいたします。

### 3) 一般演題（口頭発表者）座長の方へ

- ・10時15分までに、朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター2階中会議室（201）前の「演者・座長受付」にて受付を行ってください。
- ・プログラムの開始および終了時刻を厳守してください。



## 会場へのアクセス

会場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター（新潟市）

〒950-0078 新潟市中央区万代島 6 番 1 号

TEL.025-246-8400 FAX.025-246-8411

<新潟駅から>

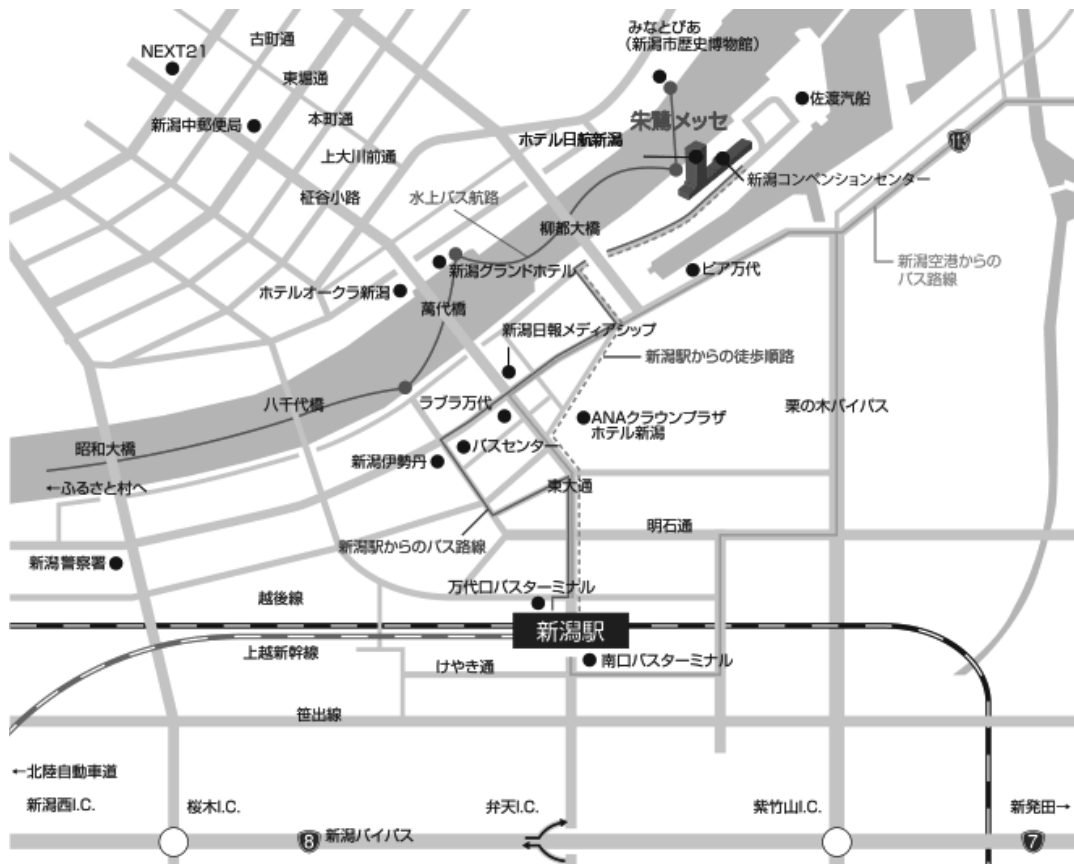
- バス（佐渡汽船行き） 約 10 分  
（万代口バスターミナル 3 番線乗り場「佐渡汽船行き」「朱鷺メッセ停留所」で下車）
- タクシー 約 5 分
- 徒歩 約 20 分

<新潟空港から>

- バス（新潟駅まで） 約 25 分（約 30 分間隔で発車）
- タクシー 約 20 分（約 2,600 円）

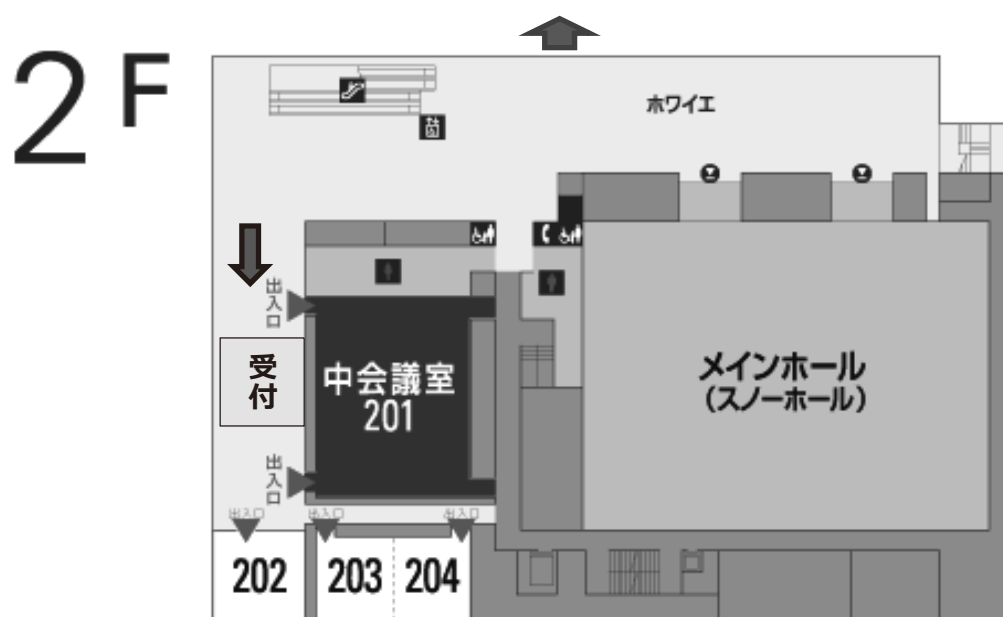
※詳しい情報は、朱鷺メッセのホームページをご覧ください。

<https://www.tokimesse.com/visitor/access/index.html>



# 会場案内

会場：朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター2階中会議室（201）



# プログラム

一般演題（口頭発表・ラウンドテーブルディスカッション）

特別講演・招待講演

## 11:00~11:40 一般演題（口頭発表）

座長 廣田 直子（松本大学大学院）

齋藤 長徳（青森県立保健大学）

### 0-1 「短時間アクティブラーニングによる学習意欲向上のための 入学前導入教育」

由良 亮<sup>○\*</sup><sup>1</sup>、藤岡 美香<sup>\*1</sup>、山本 麻衣<sup>\*1</sup>、浜野 純<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>中京学院大学短期大学部 健康栄養学科、

<sup>\*2</sup>早稲田大学スポーツ科学学術院、スポーツ科学研究センター

### 0-2 「食育ボランティア活動の企画および実施が短期大学栄養士養成課程に在 籍する学生の社会人基礎力の向上に及ぼす影響」

西田 江里<sup>○</sup>、外尾 亜利珠、小玉 智章、大河内 友美、馬場 智子、

林田 美鳥

長崎短期大学 食物科

### 0-3 「栄養士養成における食物アレルギー教育の導入の試み」

有尾 正子<sup>○</sup>、渡辺 香織、鋤柄 悦子、西澤 早紀子、安藤 京子

愛知文教女子短期大学 生活文化学科 食物栄養専攻

### 0-4 「低塩食」をテーマとした実験の工夫

稲葉 洋美<sup>○</sup>、齋藤 トシ子

新潟医療福祉大学 健康栄養学科

## 11:45~12:35 一般演題（口頭発表）

座長 笠原 賀子（長野県立大学）

名和田 清子（島根県立大学）

### O-5 「栄養教諭養成における連携教育の取り組み」

渡辺 優奈<sup>0</sup>、笹川 トシ子、斎藤 トシ子  
新潟医療福祉大学 健康栄養学科

### O-6 「臨床栄養学臨地実習のマネジメント」

五味 郁子<sup>0</sup>、外山 健二、藤谷 朝実、徳永 美希、長瀬 香織、  
駿藤 晶子、鈴木 志保子、杉山 みち子  
神奈川県立保健福祉大学 栄養学科

### O-7 「管理栄養士養成課程学生の職業意識と目的意識が及ぼす 21 週間の臨地実習教育効果」

川崎 靖子<sup>0</sup>、武政 睦子、寺本 房子  
川崎医療福祉大学 臨床栄養学科

### O-8 「医療機関における管理栄養士の糖尿病患者への個別栄養指導の力量と関連する職場環境と卒前教育に関する研究」

中川 利津代  
徳島文理大学 食物栄養学科

### O-9 「管理栄養士養成施設における受験制限と合格率の関係」

酒元 誠治<sup>0\*1</sup>、辻 雅子<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>広島修道大学 健康栄養学科、<sup>\*2</sup>東京家政学院大学 人間栄養学科

## 13:30~14:20 一般演題（ランドテーブルディスカッション）

### R-1 「管理栄養士養成施設において国家試験の合格率を上げるための方策」

酒元 誠治<sup>0\*1</sup>、辻 雅子<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>広島修道大学 健康栄養学科、<sup>\*2</sup>東京家政学院大学 人間栄養学科

### R-2 「管理栄養士養成課程の学生は地域での栄養教室の企画・運営を通じて何をどのように学んだかに関する研究」

三隅 幸子<sup>0</sup>、江口 昭彦、久野 一恵

西九州大学 健康栄養学科

### R-3 「管理栄養士養成課程における臨床実践力育成を考える：客観的臨床能力試験（OSCE）導入の意義と普及可能性」

佐藤 香苗<sup>0\*1</sup>、石井 優子<sup>\*1</sup>、佐々木 正子<sup>\*1</sup>、山王丸 靖子<sup>\*2</sup>、和田 政裕<sup>\*2</sup>  
山部 秀子<sup>\*3</sup>、川上 貴代<sup>\*4</sup>、田中 政巳<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup>東都医療大学、<sup>\*2</sup>城西大学、<sup>\*3</sup>天使大学、<sup>\*4</sup>岡山県立大学

### R-4 「栄養士養成施設における産官学連携による課題解決型授業の取り組み」

田中 恵子<sup>0</sup>、藤岡 美香、山本 麻衣、山根 沙季

中京学院大学 健康栄養学科

### R-5 「研究志向を持った管理栄養士養成を考えるー栄養教育論の試みー」

須永 美幸

聖徳大学 人間栄養学科

### R-6 「長野県立大学のチャレンジ」

笠原 賀子<sup>0</sup>、金田一 真澄

長野県立大学

## 特別講演・招待講演

共通テーマ「管理栄養士・栄養士教育のあり方」

座長 斎藤トシ子（新潟医療福祉大学）

### 14:40～15:40 特別講演

「管理栄養士・栄養士教育への期待」

厚生労働省健康局健康課栄養指導室長 清野富久江先生

### 15:50～16:30 招待講演Ⅰ

「管理栄養士・栄養士のめざす姿の現状と今後」

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部栄養学科教授 鈴木志保子先生

### 16:35～17:15 招待講演Ⅱ

「栄養学教育におけるPENの活用」

金沢学院大学人間健康学部健康栄養学科教授 木戸康博先生





# 抄録

## 一般演題

(口頭発表・ラウンドテーブルディスカッション)

特別講演・招待講演

## 一般演題（口頭発表）

〔0-1〕

### 短時間アクティブラーニングによる 学習意欲向上のための入学前導入教育

○由良 亮<sup>\*1</sup>, 藤岡 美香<sup>\*1</sup>, 山本 麻衣<sup>\*1</sup>, 浜野 純<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> 中京学院大学短期大学部健康栄養学科,

<sup>\*2</sup> 早稲田大学スポーツ科学学術院 スポーツ科学研究センター

【目的】栄養学は医学を初めとする自然科学を柱とした広範な学問である。そのため、栄養士に求められる調理スキルも、これを前提として、様々な視点から見た調理技術が必要となる。しかし、日本では家政学から派生した経緯もあり、中等教育の現場において、正確に認知されることは多くない。そのため、学習者は養成課程に入学して初めてその概要に触れることとなり、そのギャップから学習意欲を低下させる要因となっている。

本学ではこの問題に対して、入学前にスクーリングを行い、アクティブラーニングを利用することで、学習意欲の低下を防ぐ取り組みを続けている。2017・2018 年は、調味スキルと人体の生理の関係をテーマとして、ラーニングプログラムを作成し、実施しており、その有効性について報告する。

【方法】入学前導入教育に参加した学生を 4-6 人程度の班に分けて、下記プログラムを実施した。そして、実施後振り返りのアンケートを取り、データマイニングを行った。

- 1 (10 分) : 食品の機能と味覚についての講義
- 2 (10 分) : 課題 1-食塩水 (0.8, 0.9, 1.0%) のブラインド評価 (濃度順と好み順)
- 3 (10 分) : 塩分濃度の推定方法を考えて班で方法を話し合ってもらう
- 4 (15 分) : 課題 2-未知濃度の食塩水と同濃度の食塩水を作成し濃度を 0.1%刻みで推定する  
配布物 : 0.1 ~ 200 g の電子スケール・水 500 mL・紙コップ 4 個・食塩
- 5 (10 分) : 塩分濃度の答え合わせ。味覚の生理, 調味%の説明。濃度計算の重要性を解説
- 6 ( 5 分) : 「手ばかり」と献立作成の関連と意義を説明
- 7 ( 5 分) : 課題 3-卵を配布し「手ばかり」を行う。実際にスケールで測定して比較する。  
卵と同じ重量の薄力粉・グラニュー糖をスケールで測り取り体積を比較する
- 8 (10 分) : 課題 4-卵と食塩を配布し、「手ばかり」のみでスクランブルエッグを調理する
- 9 ( 5 分) : まとめとアンケート

【結果】2017 および 2018 年の集団には有意な差は認められず、同様な傾向が見られた。また、アンケートをクラスター分析により分類し、両年を比較したところ、どちらもプログラムに対する印象により、3つの集団に分類された。

- 1 : 「難しかった」が「ついていけるか不安に感じた」→食行為もしくは調理に対して消極的
- 2 : 「入学後に向けて学習意欲が湧いた」→課題の成果にかかわらず楽しんで受講した
- 3 : 「必要な準備を感じた」→食行為もしくは調理に対して積極的に課題も比較的成功的

〔0-2〕

## 食育ボランティア活動の企画および実施が短期大学栄養士養成課程に在籍する 学生の社会人基礎力の向上に及ぼす影響

○西田 江里、外尾 亜利珠、小玉 智章、大河内 友美、馬場 智子、林田 美鳥

### 長崎短期大学 食物科

【背景および目的】長崎短期大学食物科栄養士コースでは平成 29 年より長崎県の食育ボランティアに登録し、「総合演習 B」という授業の中で地域に対する食育活動「白蝶クッキングスタジオ」を実施している。この活動の特色として、食育活動であれば、内容を特に制限せず、学生は自らが興味を持った対象者の特性や状況を検討し、それぞれが重要だと思われる活動を実施する。平成 29 年度は「白蝶クッキングスタジオ」として小学生・高齢者家族を対象とした活動を実施し、その他に地域住民対象の活動を複数回実施した。これらの活動が学生の学修意欲や社会人基礎力に対して影響を及ぼすかについて検討したので報告する。

【方法】対象学生は長崎短期大学食物科栄養士コースにおいて「白蝶クッキングスタジオ」やその他の学外ボランティア活動に参加し、調査協力の同意を得られた者のうち、途中参加であった 2 名と男子学生 1 名を除く女子学生 28 名とした。学生はその主担当内容より、活動のリーダーやサブリーダーを担当したリーダー群、調理の示範や講話を担当した示範・発表群、参加者のサポートを担当した参加者サポート群の 3 群に分け、活動終了後に実施した食育活動に関するアンケート結果より学修意欲を、1 年次、2 年次（食育活動前、食育活動後）に実施した社会人基礎力テストである PROG テスト（河合塾グループ）の結果より社会人基礎力を算出した。

【結果および考察】活動後に取ったアンケート結果より、学生は活動の種類や担当内容に関わらず、活動が「自身の成長に役立つ」（71.4%）「将来の栄養士業務に役立つ」（96.4%）と認識し、「今後も同様の活動をしたい」（92.6%）、「学外の人とのコミュニケーションをとりたい」（67.9%）とボランティア活動に意欲的であった。また、示範・発表群の 50% が今後の「学校の授業や実習をがんばりたい」と回答し、学外参加者の前に立つことが学修意欲の向上につながっていた。

社会人基礎力においては、リテラシーでは活動前と活動後では群間で有意な差は見られなかった。コンピテンシーでは活動前には群間の得点の差は見られなかったが、活動後に有意な差がみられ ( $p < 0.05$ )、リーダー群は他の群よりもコンピテンシー得点が高い傾向がみられた。よって、「白蝶クッキングスタジオ」含む学外ボランティア活動は、学生の学修意欲の向上につながり、特にリーダーやサブリーダーを務めた学生は社会人基礎力におけるコンピテンシーが向上する傾向が示された。

〔0-3〕

## 栄養士養成における食物アレルギー教育の導入の試み

○有尾 正子、渡辺 香織、鋤柄 悦子、西澤 早紀子、安藤 京子

愛知文教女子短期大学 生活文化学科 食物栄養専攻

【目的】日本の食物アレルギー有症率は、乳児が約 10%、3 歳児が約 5%、保育所児が 5.1%、学童以降が 1.3~4.5%とされ（食物アレルギーの診療の手引き 2017：食物アレルギー研究会）、乳幼児の有症率が高い割合を占めている。本学では、平成 15 年度より食物アレルギーに対応したクリスマスパーティーを 12 月に開催している。この取り組みが、平成 19 年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」（文部科学省）に採択され、本学の栄養士養成教育の柱となった。さらに平成 28 年度には、保育所における職種間連携を含む食物アレルギー教育を推進することを目的とした事業に対して、「私立大学研究ブランディング事業」（文部科学省）に選定された。その事業の一つに食物アレルギー教育を強化するために独自の科目「食物アレルギー演習」を平成 29 年度より必修科目として開講した。本調査は、「食物アレルギー演習」を受講した学生を対象に、授業内容を理解した割合と習得内容の活用の割合を調査し、授業内容の充実と活用方法の検討を目的とした。

【方法】食物栄養専攻 1 年次（平成 29 年度）に食物アレルギー演習を受講した 37 名に対して、春期休暇中の課題として、食物アレルギー対応クリスマスパーティーに提供する料理の献立作成を指示した。食物アレルギー演習での内容を理解できた学生の割合と献立作成時に習得内容を参考にした学生の割合を食物アレルギー教育に関するアンケートとして実施した。

【結果】食物アレルギー演習の授業内容を理解できたかという質問に対して、講義・演習は、「よく理解できた」51.4%、「だいたい理解できた」48.6%。実習は、「よく理解できた」73.0%、「だいたい理解できた」27.0%であった。食物アレルギーパーティー用の献立作成時に講義・演習は、「参考にした」45.9%、「少し参考にした」45.9%、「参考にしていない」8.1%。実習は、「参考にした」64.9%、「少し参考にした」27.0%、「参考にしていない」8.1%であった。また、今年度の食物アレルギー対応のクリスマスパーティーで活用できると思うかについては、講義・演習、実習ともに 90%以上の学生が「活用できると思う」と回答した。

### 【論点】

- ・ 栄養士養成における食物アレルギー教育
- ・ 授業内容の発展
- ・ 教材の作成
- ・ 習得内容の活用（学内・現場）

〔0-4〕

## 「低塩食」をテーマとした実験の工夫

○稲葉 洋美 斎藤 トシ子

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康栄養学科

【背景】2年生を対象とした「栄養学実習Ⅰ」では、以下3項目を目的とした実験を行っている。①Naの体内動態の理解 ②「低塩食」の摂取と食事記録の特徴の理解 ③学生自身の低塩食生活の経験。授業内容としては、学生に自分が考える「低塩食」と「高塩食」を3日間ずつ摂取させ、同時に24時間蓄尿および食事記録を取り、エネルギーおよび栄養素摂取量を算出するものである。その結果、学生が考える「低塩食」は「高塩食」と比較すると、エネルギーおよび栄養素摂取量が低値であった。この結果より学生は、適切な低塩方法を理解していない、または認識せずに食事の全体量を減らすこと、欠食することで「低塩食」期を過ぎた可能性が考えられた。そこで、学生実験においてこのような認識を改善することが重要であると考え、今回は2015度の学生レポートの解析結果をもとに授業を展開することとした。

【目的】「低塩食」に関する実験において、学生に「事前学習を提示し実験目的を明確に伝える」ことで前年度と比較して質の高い授業展開が可能であるかを検証した。

【方法】2017年5～6月、本学健康栄養学科の2年生男女合計26人を対象とした。「栄養学実習Ⅰ」で行っている「低塩食」をテーマとした実験のうち、書面にて同意が得られた学生のレポート中の値を解析対象とした。本実験に先立ち「予め理想的な低塩食の工夫を調べてから授業に臨むこと」の課題を課した。また、「実際に対象者への指導方法として適していると考えられる低塩方法」を実践するように指導した。さらに、今年度は栄養価計算とユリンメートの使い方の練習を行ってから一連の実験を行った。解析にはRを用い2群間の比較にはpaired t-testを用いた。p<0.05%を有意水準とした。

【倫理的配慮】新潟医療福祉大学の倫理委員会にて承認を得た(承認番号17811-170608)。

【結果および考察】「事前学習および本実験の目的の明確化」により学生が考える「低塩食」が理想的な内容になるかを検証したが、「高塩食」と比して「低塩食」では、前年度と同様、有意に摂取エネルギー量が低下した(p=0.002)。一般に低塩食の摂取により総エネルギー摂取量は低下することが知られているため、低塩食摂取によりエネルギー摂取が低下することは避けられないが、学生のうちに総摂取エネルギー量は確保しつつ、低塩食を作るための具体的な方法を習得することが望まれる。

### 【検討課題】

1. 目的の明確化は重要であるが、具体的にどの様に明確化することが学習効果を高めるのか更なる検討を要す。
2. 低塩食の具体的な方法の習得に向けては、栄養学実習だけでなく、調理実習、栄養教育実習等の科目間連携をどのようにするかを検討を要す。

〔0-5〕

## 栄養教諭養成における連携教育の取り組み

○渡辺 優奈、笹川 トシ子、斎藤 トシ子

新潟医療福祉大学 健康栄養学科

【背景・目的】学校現場に身を置く栄養教諭において、多職種と連携・協力していく力は必要不可欠である。この能力を培う基礎を作る上で、大学の養成課程が担うところは大きい。当大学は、医療や福祉領域の多職種連携教育に力を入れているが、今まで、小中学校における教育職員の連携教育は取り組まれてこなかった。そこで平成28年度は、教育職員の連携教育の足掛かりとして、当科で養成している栄養教諭及び看護学科で養成している養護教諭の連携を目的に、2課程での合同演習を実施した。その結果、机上で連携の重要性を伝えるよりも、両課程の学生が共に演習を行うだけでも、両職種の使命や役割の相互理解につながり、学生からはもっとやりたいという意見が挙げられた。そこで平成29年度には栄養教諭、養護教諭、学級担任の連携を目的に、3課程での合同演習を実施した。ここではこの演習を評価し、今後の栄養教諭養成におけるよりよい連携教育のあり方を検討することを目的とした。

【方法】栄養教諭（当科）、養護教諭（看護学科）及び小学校教諭養成課程（健康スポーツ学科）の3課程の4年生を対象に、教育実習終了後に実施した。当科では、4年次開講の教職実践演習の一部として位置付けた。実施にあたっては、各課程の教員が前年度の課題をもとに事前打合せを行い、演習の流れや事例の内容について検討を行った。演習当日の内容構成は、1)趣旨説明、2)アイスブレイク・自己紹介、3)各職種の役割についての発表、4)事例検討（事例1：小学校6年保健（生活習慣病予防）の授業、事例2：食物アレルギー児への給食対応について）、5)検討内容の発表、6)感想の発表の6項目とした。活動はグループワーク（事例検討と発表）を中心に行わせた。学生には、「栄養教諭・養護教諭・学級担任が学校現場でどのように連携することができるか」について演習後にレポートを提出させ、これを演習の実施評価に用いた。

【結果】レポート内容をカテゴリー化した結果、連携の相手となるそれぞれの職種の職務内容・役割について十分に理解できていなかったことに気付き、理解を深めていこうとする姿勢がみられた。さらに学生は、連携の必要性は分かっていたが、演習を行うことで栄養教諭は具体的にどの場面で、どのように学級担任や養護教諭と関わることが必要なのかについての学びがあった。

【論点】3課程の連携教育において、学生は意義ある学びができたと考える。今後は、他の事例の導入等、演習内容や評価方法について検討を重ねることが必要である。さらに、今回のような演習を教育実習の前と後に行うことができれば、より効果的な連携教育に発展するのではないかと考える。



〔0-6〕

## 臨床栄養学臨地実習のマネジメント

○五味 郁子、外山 健二、藤谷 朝実、徳永 美希、長瀬 香織、駿藤 晶子、  
鈴木 志保子、杉山 みち子  
神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 栄養学科

本学栄養学科における臨床栄養学臨地実習は、3年次後期（Ⅰ）と4年次前期（Ⅱ）の2回計6単位（270時間）を必修としている。Ⅰでは総合病院等の臨床での管理栄養士の業務を総合的に学び、Ⅱでは病院・介護保険施設における栄養ケア・マネジメント（以下、NCM）について個別の栄養ケアや多職種連携及び業務のマネジメントを学ぶことを目的としている。当該臨地実習は、次の5つの要素から14年間にわたり質の向上に取り組んできた。

**1) 臨地実習マニュアルの活用：**30施設以上で行われる臨地実習の標準化を目的としたマニュアルを作成し、学生、実習指導者及び教員間で活用している。内容は、本学科の教育目標・カリキュラム、臨地実習の目的・到達目標（コンピテンシー）、実習施設および実習指導者（プリセプター）の要件、実習依頼から学生評価までの手順、症例検討の方法、問題発生時の対応（学生の個別対応、事故対応、地震等非常時の対応）で構成されている。

**2) 施設およびプリセプターの要件：**臨床での実務経験3年以上の本学実践教育センターにおけるNCM課程あるいは大学院の修了者等で、1)のマニュアルを活用した指導ができると本学科の臨地実習ワーキンググループ（以下、臨地WG）が判断した管理栄養士をプリセプターとし、その所属先を実習施設としている。

**3) 症例検討：**Ⅱでは学生が1~2人の患者・利用者の栄養アセスメント、栄養ケア計画の作成（可能であれば、栄養ケアの実施、モニタリング）をプリセプターの監督下で実施し、臨床的思考や栄養ケア・マネジメントの実際についての指導が行われている。

**4) コンピテンシーの評価：**学生が当該臨地実習で達成すべき知識・理解など29項目のコンピテンシーを設定し、評価表としている。当該評価表を用いて実習中間日と最終日に、学生による自己評価とプリセプターによる他者評価を行う。当該評価では学生とプリセプターの建設的なコミュニケーションを図り、個々の学生の習得度や課題を振り返り、今後の学習目標の設定を行う。必要に応じて大学の担当教員が同席する。

**5) 臨地実習の点検・評価：**学科の教員がメンバーとなる臨地WGにおいて、臨地実習の運営及び各学生の実習プロセスにおける問題点を定期的に検討し、解決のための対応が随時行われている。実習終了後には、実習報告会等で学習到達度を把握し、学生による実習施設評価等をもとに実習プログラムの課題を分析する。課題は臨地WGで報告・検討した後、プリセプター懇談会で公表し、研修会やワークショップを実施するなど臨地実習プログラムの点検と改善のための取り組みを行える体制をとっている。なお、学生の実習施設満足度は、Ⅰ 81.8%、Ⅱ 84.3%であった（29年度）。

**考察・今後の課題** 以上により当該実習の質の向上は行われてきたと考える。近年、退院、退所時及び在宅療養や介護予防等地域包括ケアにおける管理栄養士の実践活動に関する学習が重視されてきていることをふまえ、今年度入学者からは国際基準500時間を満たす臨地実習プログラムを開始することとしている。

{0-7}

## 管理栄養士養成課程学生の職業意識と目的意識が及ぼす

### 21 週間の臨地実習教育効果

○川崎 靖子、武政 睦子、寺本 房子

川崎医療福祉大学 臨床栄養学科

【目的】本学科は、管理栄養士養成課程4年間のカリキュラムの中に病院、福祉施設、保育所、保健所等の施設において21週間の臨地実習を実施している。より教育効果の高い臨地実習のあり方を検討するため、学生の職業意識と臨地実習に対するやる気と目的意識を調査し臨地実習の教育効果に及ぼす影響を検討した。

【方法】同意が得られた本学科3年生48名を対象に、臨地実習前と終了後にアンケート調査を実施した。臨地実習前の職業意識とモチベーション（やる気と目的意識）の有無、事前学習の効果と学習目標到達度は5点満点、項目別理解度は10点満点として自己評価させた。

【結果】有効回答数は42名（87.5%）であった。職業意識として「管理栄養士の職業に就くことを誇りに思うか」という問いに、「かなり思う」は11名（26.2%）、「そう思う」は16名（38.1%）、「どちらともいえない」は15名（35.7%）であった。「かなり思う」と回答した学生は、臨地実習前の「食をとおして人々の健康に寄与」、「管理栄養士として専門的知識と技術を向上」の平均得点は、それぞれ $4.9 \pm 0.3$ 点、 $4.7 \pm 0.6$ 点であり、「どちらともいえない」と回答した学生の得点に比べ、有意に高値であった（ $p < 0.05$ ）。「かなり思う」と回答した学生の「臨地実習に役立つ事前学習」得点は $3.6 \pm 0.6$ 点であり「どちらともいえない」と回答した学生と比べ有意に高値であった（ $p < 0.05$ ）。また「衛生管理」、「献立作成技術」の項目別理解度も、有意に高値であった（ $p < 0.05$ ）。

臨地実習に対するモチベーションは「やる気有・目的意識有」は17名（40.5%）、「やる気有・目的意識無」は14名（33.3%）、「やる気無・目的意識有」は11名（26.2%）であった。「やる気有・目的意識有」と回答した学生は、「次の実習目標設定」の平均得点は $3.5 \pm 1.1$ 点、「生化学検査からのアセスメント」の理解度は $6.8 \pm 1.4$ 点であり、「やる気無・目的意識有」と答えた学生に比べ有意に高値であった（ $p < 0.05$ ）。また「やる気有・目的意識有」と回答した学生は「やる気無・目的意識有」と答えた学生に比べ、「対象者のエネルギーや栄養素の摂取の過不足を防ぐため、食事摂取基準の活用」の学習目標到達度の得点は $4.0 \pm 0.5$ 点であり、有意に高値であった（ $p < 0.05$ ）。

【論点または検討課題】学生自身の職業意識やモチベーションの高さが、臨地実習の事前学習への取り組み、臨地実習での理解度や実践活用に対する教育効果へ反映していた。今後、職業意識とやる気と目的意識の低い学生に対する対応方法の早期対応と、入学早期に管理栄養士の具体的な役割と求められる知識と技術体験を取り入れた導入教育のあり方が課題と考える。



〔0-8〕

## 医療機関における管理栄養士の糖尿病患者への個別栄養指導の力量 と関連する職場環境と卒前教育に関する研究

中川 利津代

徳島文理大学人間生活学部 食物栄養学科

【目的】医療機関に勤務する管理栄養士を対象に、糖尿病患者への個別指導でどのような力量が求められ、その力量と関連する職場環境を明らかにし、卒前教育に必要なカリキュラムの基礎資料とすることを目的にした。

【方法】対象者：A県の栄養士会医療栄養士協議会会員203名を対象とした。自記式調査票を用いて平成29年2月から3月に郵送により調査した。調査内容は、基本属性、一般的職場環境（下位項目6）、仕事への意欲、糖尿病患者への栄養指導に関する職場環境（下位項目5）、精神的健康（GHQ12）、医療機関における糖尿病患者への個別栄養指導の力量（20項目）である。分析方法：既存の尺度を用いた項目及び力量等については点数化し合計点数を分析に用いた。力量の平均値を中心に高低2群に分類し調査項目とMann-WhitneyのU検定、カイ2乗検定を用いた。また、調査項目のうちCronbachの $\alpha$ 係数が0.8以上の項目と力量との相関に有意差が見られた項目を確認後、Stepwise法で分析した。有意水準は5%未満とした。

【結果】回収数は112、有効回収数は93、平均年齢は40.4歳（標準偏差：12.3歳）であった。力量の高低2群の比較で有意な差が認められたのは、仕事意欲、一般的職場環境、キャリア形成・人材育成、人間関係、社会とのつながり、医療機関に勤務する管理栄養士の職場環境、同僚医療機関管理栄養士同士のサポート、糖尿病患者の個別栄養指導業務への組織的な取組、相談指導を受けられる環境、他職種との関係、管理栄養士の判断・意見の反映の項目であった。また、力量高群の方が日本糖尿病指導療養指導士の資格有りの人の割合が、有意に高かった。Stepwise法では、標準化偏回帰係数が最も大きかった調査項目は他職種との関係であった。次いで糖尿病の個別栄養指導の件数、医療機関管理栄養士の判断・意見の反映、社会とのつながりであった（調整済み重相関係数=0.668）。

【検討課題】近年、医療職の業務が専門分化し、多職種の連携や協働が図りにくく、他の職種との専門性に対する理解の乏しさがあると言われるが、本調査では、力量に関連するのは、他職種との連携が一番大きかった。先行研究を見ると、保健医療福祉系の専門職の国家試験受験可能な大学で、回答が得られた183大学のうち、卒前教育におけるチーム医療教育を実施しているのは51大学であった。卒前教育での連携教育（IPE）において、カリキュラムを組み込んでいくか検討する必要がある。また、他職種の理解やコミュニケーションスキル能力の向上、コーチングの活用等何を教えるかも今後の課題と考える。

〔0-9〕

## 管理栄養士養成施設における受験制限と合格率の関係

○酒元 誠治<sup>1)</sup> 辻 雅子<sup>2)</sup>

1) 広島修道大学健康科学部健康栄養学科 2) 東京家政学院大学人間栄養学部人間栄養学科

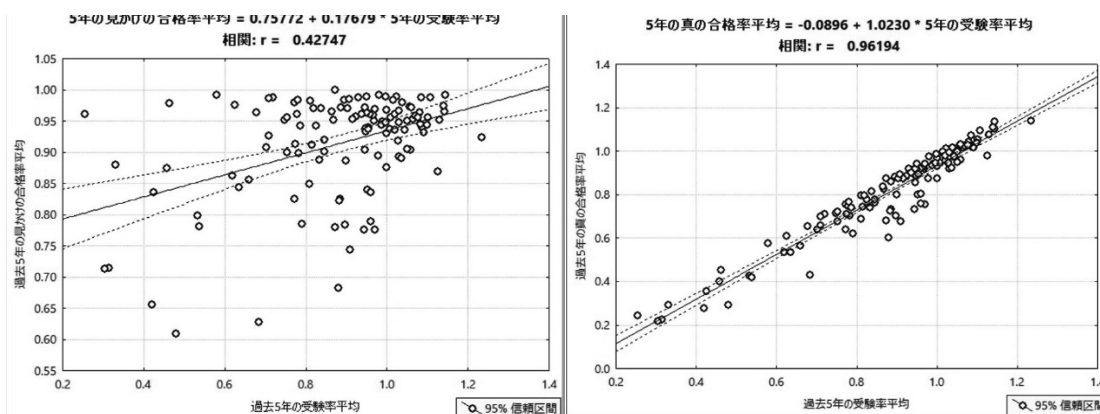
【目的】平成 30 年 3 月 20 日に発表された「第 32 回管理栄養士国家試験の結果」では、管理栄養士養成施設（養成施設）の合格率は 95.8%と、一見すると好ましい結果であった。養成施設の使命としては、必要条件として管理栄養士国家試験（国家試験）に合格させることであり、十分条件として大学を卒業した管理栄養士としてふさわしい実力を付けさせることであろう。ただ、国家試験は試験であり、十分条件を満たした人材全てが国家試験に合格する訳では無い。一方で、少子化による大学受験者数の減少から、多くの大学では定員割れの危機が迫っている。学生を集める要件として「見える化」できるものに、国家試験の合格率と就職率があげられる。その中で国家試験の合格率を上げるために受験制限を行っていると思われる事例が散見されるため、養成施設別の合格率の推移から考察を行った。

【方法】厚生労働省が国家試験の発表時に養成施設別の受験者数、合格者数、合格率を発表している。今回は過去 5 年のデータに加えて、大学別の定員を用いて、厚生労働省発表の合格率を見かけの合格率、定員から見た合格率、定員からみた受験率、真の合格率÷見かけの合格率＝一致率を 5 年平均値として算出し相関分析を行った。

【結果】以下、5 年平均値で示す。受験率  $88.2 \pm 19.8\%$ 、見かけの合格率  $91.4\%$ 、真の合格率  $81.3\%$ であった。定員と強い相関が認められたのは、受験者数  $0.9110$  と合格者数  $0.8942$  であった。受験率と強い相関が認められたのは、真の合格率  $0.9619$  と一致率  $-0.9999$  であった。

【考察】受験率と標準偏差から 1~3 割程度の受験制限が行われていることが示唆される。また受験率が高い大学では真の合格率も高く、一致率が高い大学は合格のための受験対策が適切に実施されていることが示唆された。

【まとめ】受験制限が一般的に行われていることから、定員、受験者数、合格者数が一致することは、養成施設として国家試験の合格率に関して必要条件を満たしているかについての重要な指標と考えた。



## 一般演題（ラウンドテーブルディスカッション）

〔R-1〕

### 管理栄養士養成施設において国家試験の合格率を 上げるための方策

○酒元 誠治<sup>1)</sup> 辻 雅子<sup>2)</sup>

#### 1) 広島修道大学健康科学部健康栄養学科 2) 東京家政学院大学人間栄養学部人間栄養学科

【目的】平成 30 年 3 月 20 日に発表された「第 32 回管理栄養士国家試験の結果」では、管理栄養士養成施設（養成施設）の合格率は 95.8%と、一見すると好ましい結果であった。ただ、一般演題「管理栄養士養成施設における受験制限と合格率の関係」で指摘したように、受験制限によって見かけの合格率を上げるという手法が採用されている養成施設が多いと考えられる。厚生労働省が養成施設別の合格率を公表している意図を考えると、少子化による大学受験者数の減少から、多くの大学では定員割れの危機が迫っている。この状況下で必要かつ十分な管理栄養士教育を行って欲しいということであろう。本ラウンドテーブルでは、受験制限に頼ることなく国家試験の合格率を上げるための方策について考えて行きたい。

【話題提供】厚生労働省が国家試験の発表時に養成施設別の受験者数、合格者数、合格率を公表しているが、過去 5 年のデータに大学別の定員を加え、厚生労働省発表の合格率を見かけの合格率、定員から見た合格率（真の合格率）、定員からみた受験率、真の合格率÷見かけの合格率＝一致率を 5 年平均値として算出し相関分析を行った。

#### 【演者が考える議論の方向性】

1. 大学の偏差値が低いために、受験制限はやむを得ないということについて  
ベネッセ公表の偏差値は高く出るため、東進の偏差値を使うが、東進の偏差値は全ての大学にはない。ベネッセの前後期の平均偏差値を説明変数に、東進の 80%合格偏差値を目的変数として回帰式を求めると推計東進偏差値=0.8805×ベネッセ偏差値+1.8738 (r=0.8201) が得られた。推計東進偏差値と受験率(r=0.5942)、見かけの合格率(0.4830)、真の合格率(0.6504)、一致率(-0.5212)と、全てで有意な相関が認められた。
2. 過去の発表から  
「管理栄養士教育効果の研究～3 年次の到達度が及ぼす影響～」(2014.9 日本栄養改善学会)「管理栄養士教育効果の研究～国家試験の難易度が及ぼす影響～」(2014.9 日本栄養学教育学会)があるが、その後の教育技術の向上により、4 年時 4 月時点の模擬試験での学力評価が、当初は 80/200 点スタートで合格がギリギリだったのが、60/200 点スタートでも合格が出始めているという情報も得ている。

#### 【演者からの提案】

養成施設の使命としては、必要条件として管理栄養士国家試験（国家試験）に合格させることであり、十分条件として大学を卒業した管理栄養士としてふさわしい実力を付けさせることであろう。3 年時までは十分条件を尊重して、国家試験のことを考慮しない授業を実施する。4 年時では模擬試験を毎月実施しながら学力評価を行い、合格ラインに到達しない学生については、必要条件を満たすための国試対策を集中して行う。このことを、誰が行うのかを含めて議論していきたい。

〔R-2〕

## 計量テキスト分析による実践的授業に関する学びのプロセスの可視化

～学生は地域での栄養教室の企画・運営を通じて何をどのように学んだか～

○三隅 幸子<sup>1)</sup>、江口 昭彦<sup>1)</sup>、久野 一恵<sup>1)</sup>

### 1) 西九州大学健康栄養学部健康栄養学科

【目的】本学では、地域での課題を具体的に解決するための技能取得を目指した教育内容の採用を計画的に進めており、平成 29 年には新たに 2 年学生対象に住民対象の栄養教室を企画・運営するという「健康栄養学セミナー」を開講した。本科目は、学科基幹科目として位置付けており、卒業必須科目である。今回はこの学外での実践的な授業における学びのプロセスを計量テキスト分析によって明らかにする。

#### 【学生が運営した住民対象の栄養教室の内容と構成】

講話（30 分）と講話内容と関係する食事の試食（30 分）を基本構成とした。栄養教室は「食事バランスガイド」を活用した内容とし、テーマは、「若い女性向けの活用—心も体も美しく—（20～30 歳代女性対象）」、「働く男性向けの活用—肥満予防・改善のために—（30～60 歳代男性対象）」、「高齢者向けの活用—楽しい食生活のために—（70 歳代男女対象）」の 3 種類を設定した。4 月より講話準備、献立作成、試作、住民への広報活動を行い、10 月に本番を行なった。1 回の栄養教室の定員は 20 名とした。

#### 【解析方法】

栄養教室実施後に提出された学生のレポートのうち、研究に用いることに同意が得られた学生のレポートを分析した。レポートの課題は、「栄養教室の振り返り」という課題名で、内容は「次の文章を完成させる形で、10 月に実施した栄養教室を振り返ってください。（1）栄養教室を実施する前は（2）栄養教室を実施して（3）栄養教室を実施することで学んだことは（4）来年も同じことを実施するとして、必要なことは」とした。字数制限は設けなかった。この課題に対して web 上の専用フォームにデジタルデータとして提出されたレポートを Microsoft Excel で整理したのち、計量テキスト分析ソフト（KH コーダー）に登録した。登録した文章を形態素解析によって語に切り出して要約した後、コーディングルールの作成および多変量解析によって学びのプロセスを分析した。本研究は西九州大学倫理委員会の承認を得て実施した。

#### 【結果】

受講学生 117 名のうち、同意が得られたのは 98 名であった。彼らのレポートから総抽出語数（使用）21,691(8,447)、異なり語数（使用）1,677(1,369)、文 797 ケース、段落 392 ケース、H5：392 ケースが抽出された。これらの抽出語の分析により、栄養教室実施前は「不安」を強く感じており、「対象者」や「（管理栄養士の）使命」についてほとんど意識していないことが分かった。また、栄養教室を実施したことで、「対象者」が視野に入り、栄養教室終了後に「（管理栄養士の）専門知識」や「（管理栄養士の）使命」を感じていたことがわかった。

#### 【論点】

- （1）学生は、実習が進むにつれて、何をどのように学んだか。
- （2）学生が提出した実習のレポートを KH コーダーで解析することは、授業の評価となるか。



〔R-3〕

## 管理栄養士養成課程における臨床実践力育成を考える： 客観的臨床能力試験（OSCE）導入の意義と普及可能性

○佐藤 香苗<sup>1)</sup>、石井 優子<sup>1)</sup>、佐々木 正子<sup>1)</sup>、山王丸 靖子<sup>2)</sup>、和田 政裕<sup>2)</sup>、  
山部 秀子<sup>3)</sup>、川上 貴代<sup>4)</sup>、田中 政巳<sup>1)</sup>

1) 東都医療大学、2) 城西大学、3) 天使大学、4) 岡山県立大学

【目的】管理栄養士養成施設卒業時に到達すべき学修目標の一つに「対象者とのコミュニケーションや他（多）職種との連携・協働」がある。知識偏重教育の脱却に向けて創意工夫を生かした特色ある授業計画が求められる。このような現状において、客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：OSCE）を導入している管理栄養士養成大学がある。OSCEは医療に携わる人々の臨床能力を客観的に評価するための試験で、国内の医・歯・薬学系の教育機関・医療機関において共用試験として導入されているものの、管理栄養士養成課程において実施・長期継続している大学は少ない。そこで、管理栄養士養成施設の教育課程にOSCEを導入する意義と普及可能性について、議論したい。

【方法】管理栄養士養成課程のOSCE実施校と予定校、各2校を対象に「OSCEの意義」「導入目的」「導入にあたっての困難さ」「実施（予定）学年・科目」「OSCEの概要」「実施前後の（期待される）学生の変化」「今後の課題」「OSCE普及の意義」について調査した。また、OSCEを9年間実施した大学の成績から、OSCE導入による教育効果を測定する。

【結果】①意義・目的：全校が臨地実習前教育として重視し、「学生の臨床実践力の向上」「教員の教育力向上」と回答した。その他、「無資格者が臨地実習、特に病院で臨床活動を行う際の違法性の阻却」と回答した実施校もあった。②困難さ：実施校では「教員の標準化（質保障）」、未実施校ではこれに加え、運用全般（模擬患者養成、実施時間の確保、コスト等）と回答した。③実施（予定）学年・科目：全校が3年次と回答し、科目は「栄養教育論領域科目」「総合演習」「臨地実習指導」であった。④OSCE課題：全校が3課題と回答し、その内訳は「医療面接のみ」「医療面接、身体計測、食事の聴き取り」「医療面接、身体計測、情報の提供」であった。⑤OSCE評価法：教員・模擬患者からのフィードバック、学生の自己評価に加え実施校では両校ともに筆記試験を併用していた。⑥実施前後の（期待される）学生の変化：「自己理解（省察）」「勤労観・職業観」であった。⑦今後の課題：実施校ではルーブリック評価、臨地実習先担当者との相互理解・標準化、未実施校では始動に向けた環境整備をあげた。9年実施した大学の成績では全3課題の知識と技能得点に関連性は認められず、知識・技能・態度を適正に評価するプログラムの必要性が示唆された。

【考察】知識を評価する筆記試験と技能・態度を評価するOSCEの併用やOSCE時のフィードバックをプラスに生かすプログラムの組み合わせにより、学生の省察と臨床実践への「動機づけ」「方向づけ」に有効であると考えられた。

### 【論点】

- ・臨地実習事前・事後教育や実践力育成プログラムとして、OSCEの導入・普及は可能か。
- ・教員と臨地実習施設担当者の相互理解、教育力向上には、どのような学修活動が有効か。

〔R-4〕

## 栄養士養成施設における産官学連携による 課題解決型授業の取り組み

○田中 恵子、藤岡 美香、山本 麻衣、山根 沙季

中京学院大学 短期大学部 健康栄養学科

### 【背景・目的】

近年、課題解決型の授業（以下 PBL）は多くの高等教育機関において取り入れられてきている。特に、地域（行政や企業）と共に行う産官学型の PBL の意義は、地域に根差した大学の社会貢献活動や、学生自身の「就業力」の育成といった事が挙げられる。

本学においても、学位授与方針（DP）に①問題発見力・課題解決力②実践力③コミュニケーション力④地域社会に貢献する力を掲げており、PBL を初年次教育やゼミ活動において積極的に取り入れている。本ゼミ活動では、これまでに地域の特産物の普及啓発を目的とした産官学連携のレシピ開発等を実施してきているが、どのような段階でどのような力が付いたのか具体的な評価を実施できていなかった。

そこで、産官学連携による PBL を計画的に実施した上で、学生にアンケート調査を実施し評価を行い、より効果的な PBL の方法について検討を行うことを目的とした。

### 【方法】

対象は 2018 年 4 月に食生活演習を受講している学生 17 名とした。PBL の実施については下記①～④の手順で進めた。評価については、PBL 実施後に学生の無記名自記式アンケートを実施した。そして、担当教員と補助教員による PBL 全体の評価を行った。

#### <PBL の実施概要>

PBL のテーマ：いのししひき肉を使ったレシピ開発

- ①4 月初旬 本 PBL のテーマ、目的等の概要を学生に説明し学生自身に目標設定をさせる。
- ②4 月下旬 テーマに関する内容について地域・行政の方と勉強会及び交流会を実施。
- ③5 月～6 月中旬 レシピ考案のための試作及びグループワーク（週に 1 回）
- ④6 月下旬 考案レシピのお披露目会（学生が地域・行政の方にプレゼンテーションを実施）

### 【結果】

本 PBL を通して、「成長できた」と回答した学生は 71%（12 名）であった。そして、全体の 53%（9 名）の学生は「コミュニケーション力」が身についたと回答した。その場面として、「地域の方との交流会・考案レシピのお披露目会」「学生同士のグループワーク」が挙げられていた。反対に、「成長できていない・どちらとも言えない」といった否定的な回答は 29%（5 名）であり、その理由として「作業を人任せにしていた」「やりたい内容でなかった」などの意見が挙げられていた。

### 【検討課題・論点】

- ・地域と連携した PBL に関する教育効果および学生の評価方法
- ・モチベーションの低い学生への指導方法

〔R-5〕

## 研究志向を持った管理栄養士養成を考える－栄養教育論の試み－

須永 美幸

聖徳大学 人間栄養学科

日本栄養改善学会の平成 29 年度管理栄養士専門分野別人材育成事業「教育養成領域での人材育成」報告書によれば、管理栄養士として情報のエビデンスを正しく判断するための教育は、2・3 年次に栄養統計処理・栄養情報処理演習等の科目名で約 5 割の養成施設において実施されている。管理栄養士養成の栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの枠組みには栄養学研究が位置づけられており、栄養学の実践の根拠づくりと活用に管理栄養士自ら関わることが求められている。研究志向を持った管理栄養士養成は栄養学の発展と実践の質の向上に寄与し、生涯を通じた専門性の確保・向上につながることを期待される。

栄養教育を行うためには科学的根拠に基づく情報の活用に加えて対象者に正しく伝わるレベルのコミュニケーション能力が求められる。本学の栄養教育論の授業はライフステージ・ライフスタイルに応じた栄養教育のあり方と方法を学び、栄養教育計画を提案できる能力を養うことを目的として展開している。学部教育での学生の研究志向は卒業研究により醸成されているが、その萌芽のきっかけづくりは常に考えておかなければならない。

そこで、栄養教育論の授業においてグループ討議により事例検討を進め、個人や集団を対象とした栄養課題のアセスメント、課題抽出、優先課題決定、目的設定、栄養教育計画作成を行った。この課題解決のための科学的根拠となる学術論文は、栄養の特徴を踏まえて学生自らが「問い」を考え、関連のキーワードで検索し、講読後に目的、方法、結果、考察等を一覧表に整理する作業を行った。結果は 4 名程度のグループ内で相互に発表し、質疑応答を行った。これを妊婦から高齢期、アスリートまで 6 回繰り返した。

授業の到達目標は、①ライフステージ、ライフスタイル別に食生活の特徴や栄養教育のポイントを理解し、グループ討議により事例検討を行うことができる ②栄養教育マネジメントサイクルに則し系統立てた栄養教育を立案できる ③生涯にわたるライフスタイルに応じた栄養教育計画を提案できることとした。

学習成果は、①個人や集団に対して食生活の重要性と課題を述べるができる ②対象者のライフステージ、ライフスタイルに応じて、目的に沿ったアセスメントを行い、優先課題を抽出することができる ③対象者の特性に合わせて目標を設定することができる ④目標を達成するための栄養教育計画を立案することができる ⑤栄養教育の実施に向けて、より客観的な評価を考えることができる ⑥栄養教育を見直し、改善につなげることができる ⑦栄養教育の実践に、身につけた知識と技術を応用することができることとし、授業終了時に学生の自己評価を得た。

検討課題として、①学習成果は誰が、どの時点で、どのような指標によって評価するか ②他の科目とどのように関連づけ、卒業研究につなげていくと効果的なのか 以上の 2 点について意見交換を期待したい。

〔R-6〕

## 長野県立大学のチャレンジ

○笠原賀子、金田一真澄

公立大学法人 長野県立大学

【はじめに】本学は、平成 30 年 4 月に開学した新設大学で、2 学部 3 学科 1 学年 240 名定員の小規模大学である。基本理念は、「リーダー輩出」、「地域イノベーション」、「グローバル発信」の 3 つである。大きな特徴は、少人数教育、人間としての資質を磨くための 1 年次全寮制と 2 年次全員参加の海外プログラムである。100 分授業、4 学期制を取り入れるとともに、ディスカッション等によるアクティブラーニングを積極的に実施する。英語教育にも力をいれ、1 年次・2 年次は週 4 回、クラス別に開講する。

管理栄養士養成課程は健康発達学部食健康学科に位置付けられ、定員 30 名である。

【方法】本学の管理栄養士養成教育課程について、平成 30 年 3 月に特定非営利活動法人日本栄養改善学会より公表された「教育養成領域での人材育成」報告書に基づいて分析する。

【結果】管理栄養士養成の栄養学教育モデル・コア・カリキュラム（枠組み）の 5 領域にそって、本学の取り組みを下記に示す。

A 管理栄養士として求められる基本的な資質・能力：すべての教育課程に含有される内容である。特徴的な科目としては、1 年次に管理栄養士活動論、臨床医学概論（専門基礎科目）、健康発達実習（学部共通）、発信カゼミ・象山学（全学共通）等を開講する。

B 専門基礎分野：これからの管理栄養士にとって必要と考えられるが、従来の科目構成にない科目（経営学入門・アカウントティング入門：2 年次、リーダーシップ論：3 年次）を導入する。

C 専門実践分野：3 年次から卒業研究につながるゼミを実施する。

D 統合分野：臨地実習については、3 年次 4 学期を全て実習に充てることで、ICDA の世界基準 500 時間の実習時間（科目により、2 年次、3 年次の長期休暇も含む）を確保する。

E 栄養学研究：2 年次から、英語集中プログラムおよび専門科目において、PEN（Practice-based Evidence in Nutrition）を導入するとともに、3 年次 3・4 学期から卒業研究を実施する。

【まとめ】本学のチャレンジは、始まりの緒に就いたばかりであるが、学生・教員共に力を合わせて、より良い管理栄養士養成をめざす。

### 【検討課題】

- ・臨地実習における学修方法（問題解決型学修等）をどのように工夫するか。
- ・臨地実習を実施するにあたり、実習先とどのように連携するか。
- ・実践栄養学研究の視点をどのように涵養するか。



## 〔特別講演・招待講演〕

### 特別講演

#### 「管理栄養士・栄養士教育への期待」

清野 富久江

厚生労働省健康局健康課栄養指導室長

少子高齢化がいつそう進展するなかで、健康寿命の延伸に向け、予防可能な疾病を予防し、身体機能や生活機能を維持させるためには、栄養・食生活が重要である。栄養・食生活はすべての国民の営みに不可欠であり、専門職として栄養・食生活の視点から一人一人の生活や暮らしに寄り添い支えるのが管理栄養士・栄養士の役割であるといえる。

2000年の栄養士法改正では、がん、脳卒中、心臓病、糖尿病等の生活習慣病の発症と進行を防ぐためには、生活習慣の改善、なかでも食生活の改善が重要な課題であり、栄養指導の分野においては、個人の身体状況や栄養状態等を総合的・継続的に判断し指導するための高度な専門知識・技能が必要であることから、こうした業務に対応できる管理栄養士を育成するための改正が行われた。

この法改正以降、保健・医療・介護・福祉・教育などの各領域において制度改正等が行われ、管理栄養士の業務が各制度等に位置づけられてきており、管理栄養士の社会的な役割は大きなものとなってきている。

今般の2018年度診療報酬・介護報酬改定においては、いわゆる団塊の世代が75歳以上となる2025年に向けて高齢者人口が急速に増加すると考えられていることから、地域包括ケアシステムを構築するため、日常生活の視点を踏まえ患者に寄り添ったきめ細やかな栄養管理と、関係機関等の栄養連携を推進することを理念として改定が行われている。管理栄養士・栄養士が地域包括ケアシステムの構築に寄与し、その専門性を発揮することが期待されている。

現在、管理栄養士・栄養士養成施設数は、管理栄養士養成施設148校、栄養士養成施設156校となっている。管理栄養士養成施設は、栄養士法改正当時41校、改正法による新しい養成カリキュラム施行時75校であり、法改正を契機に増加しその後も増加し続けている。

管理栄養士は、栄養学の知識と技能を習得した専門職として、他のさまざまな専門職と協働で業務を遂行することが多くなっており、高度な知識及び技能に加え、栄養管理を実践する上で必要な論理的な思考・判断力、問題解決能力が求められる。管理栄養士・栄養士教育については、卒業後、管理栄養士・栄養士が栄養の専門職として活躍できるよう質の高い栄養学教育が期待されるとともに、管理栄養士等の栄養管理の実践活動の成果を見える化するするとともに、その活動を支える科学的根拠として栄養学の推進も期待される。

## 招待講演 I

### 「管理栄養士・栄養士のめざす姿の現状と今後」

鈴木 志保子

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部栄養学科

厚生労働省 平成 29 年度管理栄養士専門分野別人材育成事業「教育養成領域での人材育成」のうち日本栄養改善学会が「管理栄養士・栄養士のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの検討」のために実施した「管理栄養士・栄養士のめざす姿アンケート調査」の結果を用いて、管理栄養士・栄養士のめざす姿の現状と今後について考察する。

「管理栄養士・栄養士のめざす姿アンケート調査」は、管理栄養士・栄養士の「めざす姿」および「資質・能力」について、調査研究および他専門職種のコア・カリキュラムにおける「期待される像」と資質・能力の分析等を中心に考察した。

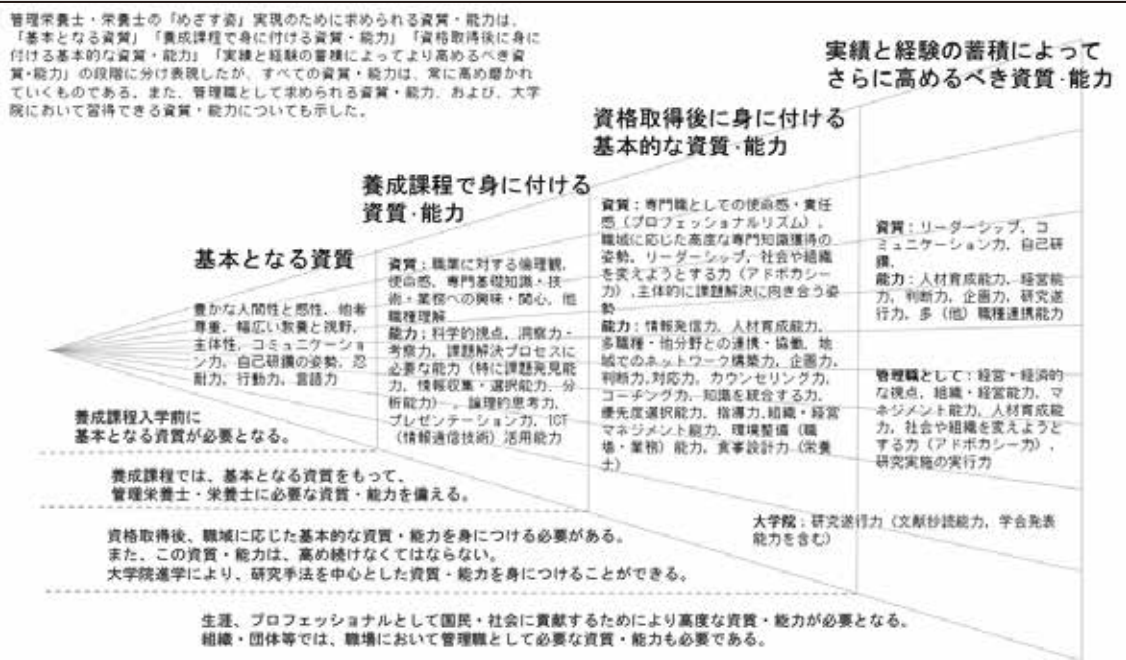
調査研究では、多様な領域で現在活躍する管理栄養士・栄養士の先生方を対象に、管理栄養士・栄養士の求められる資質や能力、卒前教育に必要な教育カリキュラムのニーズ等を明らかにすること（調査 1）および、主に教育養成機関に所属する日本栄養改善学会評議員を対象に、各人が学部教育の中で想定されている管理栄養士・栄養士のめざす姿およびめざす姿の実現に向けて基本的と考えている資質・能力等について把握すること（調査 2）を目的として 2 種類の質問紙調査を行った。調査 1 は、223 名、調査 2 は 33 名を対象として結果をまとめた。

その結果、下記のように管理栄養士・栄養士のめざす姿を導いた。

管理栄養士・栄養士のめざす姿

- 管理栄養士・栄養士は、栄養・食を通じてあらゆる人々の健康の維持増進、疾病予防、治療に貢献することをめざす。
- 管理栄養士・栄養士は、幅広い教養を持ち、豊かな人間性、深い洞察力、生命への尊厳や倫理観を備え、プロフェッショナルとして職務遂行をめざす。
- 管理栄養士・栄養士は、向上心と専門職としての誇りを持ち、自己研鑽に努め、常に職務の向上をめざす。

また、管理栄養士・栄養士の「めざす姿」実現のために求められる資質・能力については、次の図のように表現した。



## 招待講演 II

### 「栄養学教育における PEN の活用」

木戸 康博

金沢学院大学人間健康学部健康栄養学科

PEN (Practice-based Evidence in Nutrition) は、継続的に更新される栄養学の知識データベースであり、科学的根拠に基づく実践ガイダンスへの簡単なアクセスを提供するシステムです。カナダ栄養士会によって始められたもので、現在は、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、アメリカで活用されています。この PEN システムを利用することは、管理栄養士・栄養士が科学的根拠に基づく活動を実践するために、また、科学的根拠に基づく専門職の教育のために有用であると考えられます。

管理栄養士・栄養士は意思決定に最新の科学を用いることが期待されています。科学的根拠に基づく意思決定への方向性とスキルは、栄養学教育の中で始まり、卒後も継続することが必要です。多忙な管理栄養士・栄養士でも、新しい科学的根拠が出現するたびに、これらに遅れをとらないようにしなければなりません。人々の健康の保持増進、疾病の発症予防と重症化予防、また介護予防に貢献できる栄養の指導を実践するためには、情報化時代においては、管理栄養士・栄養士には新しいツールが必要です。PEN システムは継続的に更新が行われる栄養学の知識ベースであり、科学的根拠に基づく実践ガイダンスに簡単にアクセスできます。

管理栄養士・栄養士は、食と栄養の専門職です。専門職には、固有の知識体系（データベース）を所有すべきです。食と栄養に関する固有のデータベースが必要です。栄養学は応用科学です。専門職として見られるためには、食と栄養に関する専門科学だけでなく、これらに関連する様々な科学と統合された知識が必要です。これらの統合された知識を維持しなければなりません。PEN システムは、私たちの専門的な知識を統合した科学的根拠の集大成であり、管理栄養士・栄養士による多様な用途に簡単に引き出せるように体系化したものです。

日本の栄養学教育現場で、PEN システムを利用することによって、日本栄養士会が進めている科学的根拠に基づく栄養学教育とその実践を推進し、日本と世界中の国民に適用される調査研究、政策と栄養学的知識の啓蒙と利用の向上に結びつくと考えられます。PEN は、常に論文や対象者向きツールキットをはじめ、実践的な質疑応答が日々更新され、最新の情報を得ることができます。さらに、e-News の発行やツイッターやフェースブック、リンクドインによる栄養士同士の情報交換等、管理栄養士・栄養士として、さまざまな情

報を共有することができます。日本国内外での有用な情報（論文や資料、制度）について、掲載依頼をすることが可能です（掲載についての判定はあります）。世界に向けて、日本の管理栄養士・栄養士の素晴らしい活動をアピールすることもできます。私たちは、常に最新の正しい情報をもとに、それらを目の前の対象者に適応する知識と技術を身につけ、それらを向上し続けなければなりません。PEN は、新しい時代を切り開く管理栄養士・栄養士にとって、必須のアイテムとなると思います。

興味のある方は、下記、URL をご参照ください。15 日間の無料体験ができます。URL: <http://www.pennutrition.com>



第7回日本栄養学教育学会学術総会講演要旨集

発行 平成30年9月2日

編集発行者 第7回日本栄養学教育学会学術総会

会長 斎藤 トシ子 (新潟医療福祉大学)

[jane7@dobun.co.jp](mailto:jane7@dobun.co.jp)



**JANE**

Japanese Association of Nutritional Science Education  
一般社団法人 日本栄養学教育学会